

書 評

中國詩文研究會 松原朗編

『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』

遠 藤 星 希

明海大學

中國における杜甫研究の熱量は一貫してすさまじく、研究書・注釋書の類が息をつく暇もないペースで毎年陸續と出版されているのみならず、『杜甫研究學刊』という専門の季刊誌まで存在し、二十五年以上（繼續前誌の『草堂』も含めれば三十年以上）にわたって發行され續けている。それに比べれば、日本における杜甫研究の成果が數量的に寥々としていることは否めないだろう。

ただ、近年になって杜甫に關する專著が日本でも相次いで出版されているのは、注目に値する變化といえる。こ

五・六年の間に刊行された研究書・一般書をざつと以下に舉げてみると、

○古川末喜著『杜甫農業詩研究』（知泉書館、二〇〇八年八月）

○宇野直人・江原正士著『杜甫——偉大なる憂鬱』（平凡社、二〇〇九年二月）

○興膳宏著『杜甫——憂愁の詩人を超えて』（岩波書店、二〇〇九年十月）

○後藤秋正著『東西南北の人——杜甫の詩と詩語』（研文出版、二〇一一年十月）

○川合康三著『杜甫』（岩波書店、二〇一二年十月）

○後藤秋正著『杜甫詩話——何れの日かはれ歸年ならん』（研文出版、二〇一二年十一月）

○谷口眞由實著『杜甫の詩的葛藤と社會意識』（汲古書院、二〇一三年二月）

○後藤秋正著『花燃えんと欲す——續・杜甫詩話』（研文出版、二〇一四年九月）

これに加えて、未完に終わっていた吉川幸次郎氏の『杜甫詩注』が、興膳宏氏の補筆・編集によって岩波書店から繼續刊行されていること（二〇一二年十一月から二〇一四年十月現在に至るまでに、第一・二・六・七・八冊が刊行済み）、さらには、清・仇兆鰲『杜詩詳注』の解釋に依據した杜甫詩の全譯注が、約四十名の共同執筆によって講談社學術文庫から刊行豫定であることも、今後の大きな楽しみである。

こうした杜甫研究の機運の高まりは、二〇一二年が杜甫の生誕千三百年に當たることと決して無關係ではないだろう。この記念すべき年に刊行された『中國文學報』第八三冊は、「杜甫誕生一千三百年特刊」として杜甫に關する論文十四篇を一舉掲載した（なお、一九六二年發行の『中國文學報』第十七冊でも、「杜甫誕生一千二百五十年特刊」として特集が組まれている）。これとはほぼ時を同じくして刊行されたのが、中國詩文研究會 松原朗編『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』である。

本論文集に收録された論文の数は、全部で十四篇。松原朗氏の「まえがき」「あとがき」によると、著者の内譯は、

中國詩文研究會の會員の七篇、會員外の日本の研究者の四篇、中國の研究者の三篇である。なお、中國の研究者の三篇はいずれも既發表であり、杜甫に關する著者自身の論文の中から一番の自信作を推薦してもらい、それを日本語に翻譯したもの。全體は四部に分けて配列されており、第一部は「杜甫の生涯の一時期に密着したテーマを扱った六篇」、第二部は「詩體論もしくは主題論に關わる五篇」、第三部は「書誌校勘に關わる一篇」、第四部は「日本における杜甫受容を論じた二篇」となっている。本書に收録された論文のタイトルおよび著者名を記すと、以下の通りである（敬稱略）。

〈第一部〉

天寶十四載、杜甫四十四歳——仕官前夜の詩と人生——

古川末喜

杜甫の「詩の死」——そして秦州における詩の復活——

松原朗

杜甫の舊居を詠ずる唐末・五代の詩——同谷と成都を中心

として—— 後藤秋正

杜甫のまわりの小さな生き物たち 川合康三

杜甫の離蜀後の行跡に關する考察——ならびに杜甫の死に

ついて—— 陳尙君「石井理譯」

杜甫「李潮八分小篆歌」の李潮は李陽冰ではないのか

——戸崎哲彦氏〈非同一人物説〉への疑問—— 内田誠一

〈第二部〉

杜甫七律の「變格」の原理と意義——明代詩論に見られる

七律の傾向に關する論争を手がかりに—— 葛曉音「丸井

憲譯」

七言拗律論の濫觴と展開——杜甫から黃庭堅へと受け繼が

れたもの—— 丸井憲

杜甫の〈友情詩〉に關する覺書 高橋良行

杜陵野客と腐儒 土谷彰男

「暝色」の平仄について——仇兆鰲の音注に對する一つの

疑問—— 矢田博士

〈第三部〉

宋人による杜詩校勘の成果とその影響について 莫礪鋒

「石碩譯」

〈第四部〉

杜甫の越えてゆく言葉——子規の眼—— 加藤國安

國語科教材の中の杜甫 堀誠

執筆陣には日中の第一線で活躍する研究者が揃えられている。各論文のテーマ・問題意識は多岐に亘っており、「まえがき」で「配列には工夫したつもりだが、便宜的とならざるを得なかった面もある」と斷っている松原朗氏の苦慮は推して知るべきであろう。本書の最大の特徴は、まさに執筆者それぞれによって設定されたテーマの多彩にある。本書を通讀すれば、細分化された杜甫研究の各分野におけるこれまでの蓄積、および問題點を横斷的に把握することが可能なだけでなく、當該分野における最新の成果が執筆者によって生み出されるその瞬間に、讀者は立ち會うことができる。

以下、本書所收の論文について紹介し、卑見を述べたいと思う。ただ紙幅の関係もあり、收載論文を満遍なく評す

ることは、未熟な評者の手に剩る。紹介が部分的にならざるを得ないことを、あらかじめ御容赦頂きたい。

* * *

肅宗の乾元二年（七五九）七月、杜甫は華州司功參軍の職を罷め、家族を連れて西の秦州に向かった。同年八月に秦州に到着し、當地に約三箇月逗留する。この秦州の時期を境にして、杜甫の詩の内容に變化が生じたことは、多くの研究者によってしばしば指摘されてきた。この變化が何に起因するものなのかは、いまだ定説を見ない。本書に収める松原朗氏の「杜甫の「詩の死」——そして秦州における詩の復活——」は、この大きな問題に正面から挑み、一つの答えを提示した意欲的な論考である。

同論文中では、次のような問題提起がなされている。

「秦州の詩が、それまでとは異なる様相を呈していたことは、すでに多くの論者によって指摘されている。曰く、全てを五言詩が獨占。曰く、微細なもの、生命力の衰弱したものへの關心の集中。曰く、形象の裏面に延びるグロテス

クな想像力。問題とすべきは、いったい何がこのような特徴を杜甫の詩にもたらしたのかである」（七一頁）。松原氏はさらに述べる。「今迄の研究では、秦州の詩に起こった新しい事態を、杜甫が秦州で出会った「新しい風土」と結びつけて解釋しようとしてきたが、それは必ずしも有効な方法ではないであろう」（七二頁）。

そこで松原氏が着目したのが、華州を發ってから秦州に到着するまでに、杜甫が一篇の詩も作っていないという事實である。松原氏が豊富な例を擧げて證するように、杜甫は「一定期間逗留した土地を去って旅程に上るときに、出立の詩を作るのが通例」（四九頁）であった。しかし華州出立の詩は作られていない。また、「杜甫はその後、秦州から秦嶺を越えて同谷に赴く時も、同谷から蜀道を越えて成都に赴く時にも、それぞれの山越えを描く二組の各一二首からなる大規模な紀行詩を作っている」（五一頁）のだが、秦州への道中では、古來名だたる隴山を經由するにも關わらず、一篇の詩も詠まれていない。これは確かに奇妙な現象といえる。松原氏はこの作詩の空白を「詩の死」と名づ

け、秦州における詩作の再開を「詩の死」からの復活と位置づけた。そして、秦州における杜甫の詩の變容を、その直前の「詩の死」との関係からとらえ直そうと試みたのである。

では「詩の死」を杜甫にもたらした原因は何か。松原氏はそれを、華州司功參軍を免官された時に受けた精神的負傷に由来するとみなし、その負傷の内容は「杜甫の人格的尊嚴が蒙った恥辱」（七三頁）であると推測する。この推測の根據として、松原氏は「秦州期における諷諭の變質」

（同頁）を挙げる。松原氏曰く、華州以前の杜甫の詩には、わが身の不幸や苦境を更なる苦難の中にいる民衆への共感に擴大し、「世界の隅々の痛みを己れの痛みとして直覺する『身體の肥大化』とも稱すべき感覺」（六二頁）が見られた。「この感覺を根底で保證しているのは、制度としての『天子』であり、「杜甫と天子の關係は、杜甫の天子に對する信賴を前提として成立する」（六三頁）。そして秦州期における杜甫の諷諭詩には「身體の肥大化」の感覺が消滅していることをさらに指摘し、この變質を「肅宗によって

杜甫の人格尊嚴が否定された、その肅宗の仕打ちによって、杜甫の『天子』肅宗に對する信賴の思いが破滅した」（七三頁）ことに起因するものとみなす。杜甫における「詩の死」は、こうした精神的負傷がもたらした堪え難い苦痛のあらわれであり、秦州時期の詩が「逡巡し、躊躇し、辟易し、屈折して、自己撞着の隘路を行き來する底のものだった」（八一頁）のは、「詩の復活」後もなお長安の世界に繋がれ、「君を堯舜の上に致さん」（奉贈韋左丞丈二十二韻「詩」という觀念に繋がれていた以前の「吾が道」を、杜甫が清算してゆく過程でもあった。

以上、ほかにも數ある重要な指摘や論據を、紙幅の關係で十分には紹介しきれなかったことを憾みとしつつ、松原氏の論考の核となる部分を評者なりにまとめてみた。松原氏の指摘の中でとりわけ斬新なのは、秦州期における杜甫の詩の變容を、秦州の風物のみではなく、詩人の内面の變化にも起因するものとみなした點、そしてその内面の變化を考察するに当たって、詩人と天子との關係性という視角を新たに導入した點である。「その變化の根柢にあるのが、

連作二十首（評者注：秦州雜詩二十首を指す）の最後に至って表明された『唐堯眞自聖、野老復何知』という認識、すなわち天子と自分との間には通路が閉ざされ関係が切斷されているという杜甫の無力感なのである」（七〇頁）。松原氏が提示した、この天子と詩人との「切斷」という視點に、評者は深い感銘を覺えた。杜詩の分析にこの視點を導入することは、ひとり秦州時期の詩のみならず、それ以後の杜詩の特質をさらに解明するためにも極めて有効な手段なのではないだろうか。

ただ、松原氏の論考の中でどうしても違和感を拭えない箇所もある。それは「華州で最後に作られたのは、次の詩である。杜甫の詩集で『華州の罷官』に言及するのはこの詩だけであるので、先入見なしに注意深く讀む必要がある」（四三頁）として氏が擧げる、五言八句の古體詩「立秋後題」の後半部「平生獨往願、惆悵年半百。罷官亦由人、何事拘形役」をめぐる解釋についてである。松原氏は「罷官亦由人」を「官を罷めるのは人のせいだ」と譯し、その根據として杜甫「有懷台州鄭十八司戸」詩の句「性命由他

人」を擧げ、次のように述べる。「この用例を見ても、『由人』が、惡意の人によって不利益を蒙る意味であることは明らかであり、この時の罷官が、人に強要された結果であることは紛れようもない」（四三頁）。そして陶淵明「歸去來兮辭」の「既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲」を明らかに踏まえている末句「何事拘形役」を、「杜甫の痛ましければかりの自己正當化のあがき」とみなすことで、整合性をつけている。

しかし評者は、「罷官亦由人」を「官を罷めるのは人のせいだ」と解釋することに躊躇を覺える。この句の解釋については、後藤秋正氏の論文「杜詩「因人」考」（『中國文化』六六、二〇〇八。のち同氏著『東西南北の人——杜甫の詩と詩語』研文出版、二〇一一にも題を改めて再録）を参考にすべきだろう。後藤氏は、陶淵明「榮木」詩の「貞脆由人、禍福無門」、鮑照「擬行路難十八首」其十八の「諸君莫歎貧、富貴不由人」、および崔湜「至桃林塞作」詩の「抱冤非忤物、罹謗豈由人」を例示し、杜甫の「罷官亦由人」が意味するところを、「杜甫が官を罷めたのは、彼の、束縛を嫌

い、自由を尊ぶ氣質に由來するものだ」とみなしている。

評者はさらに『文選』における用例を調査してみたが、全三例ある「人に由る」——班彪「王命論」の「吉凶は人に由る」、陸機「辯亡論下」の「隙を守るの人に由るを言うなり」、劉峻「辯命論」の「榮辱の境、獨り人に由ると曰わんや」——は、いずれも「個人の資質に由來する」「その人自身の行爲次第である」という意味にとれるものであった。そうである以上、「立秋後題」詩の「罷官亦由人」から「先人見なしに」まず読みとるべきは「官を罷めるも罷めないも自分次第」という詩人の自己認識であろう。松原氏が根據として擧げる詩句「性命由他人」は、確かに「鄭虔の運命が他人に弄ばれたことを悲しむ」ものだが、これは「他人に由る」だからこそ、そのような意味になり得るのであり、これを「人に由る」の解釋に援用することには慎重になる必要がある。

とはいえ、華州司功參軍を辭したのがたとえ杜甫の自發的な棄官であったとしても、秦州以降の杜詩の變容を考える上で、松原氏の論考がその價值を減ずることは無いよう

に評者は思う。最も重要なのは、氏が指摘するように、官を辭して秦州に到着した時、天子と詩人との關係がすでに「切斷」されていたことにあるからだ。天子を中心とする秩序から切り離された杜甫は、ただの根なし草となった。「天子」という制度で保障された世界からの離脱、たとえそれが自らの選擇であつたとしても、その際に生じた精神的空白が「詩の死」を招き、「詩の復活」後も後遺症として世界のあり方はなお搖らぎ、詠まれた詩篇に深く影を落としたのだと説明することが可能なのではなからうか。

* * *

文學史や概説書の類で杜甫が取り上げられる際、「細かな觀察眼」「日常的な題材を詩に取り入れた」「リアリズム」などといったキーワードがしばしば並べられる。そうした常套のフレーズにどこか物足りなさを感じている者は、本書所収の川合康三氏「杜甫のまわりの小さな生き物たち」を読むことで溜飲が下がるであらう。川合氏の當論文は、杜甫が成都の浣花草堂にいた時期の詩に、小さな生き

物たちがしばしば現れることに着目した上で、そうした生き物たち——特に鳥類と昆虫と魚——の描かれ方を分析することを通して、生き物と人との関係において文學史上の大きな轉換が生じていることを實證したものである。

川合氏は、成都滞在期の作の中から三首の律詩「卜居」・「水檻 心を遣る」二首の一・「江漲」を例として取り上げ、それぞれに見える對句「無數の蜻蜓せいて 齊しく上下し、一雙の鴻鵠けいせき 對して沈浮す」・「細雨 魚兒出で、微風燕子斜めなり」・「細やかに動く 風を迎うる燕、輕やかに搖らぐ 浪を逐う鷗」における小さな生き物の諸相を、主にその動きに着目した上で、詳しく分析する。その結果として導き出された知見を、川合氏の言葉を借りて提示するならば、以下になるであろう。

一つは、「杜甫以前の詩のなかでは、小動物も人が與えた意味を帯びることによって詩のなかに用いられた」のに對して、杜甫が成都滞在期に取り上げた小さな生き物たちは「それまでの文學の因襲のなかで定められている意味」をもたず、「寓意的な意味を負わされることなく、單に外

界の一部としてのみ存在していること」であり、もう一つは、本性に従った生を営む生き物たちの、自然と調和した情景が「日々の充足感に浸る杜甫自身の氣分と一體となっている」ことである。たとえば、「魚と鳥はどちらも三次元の空間を自在に運動する動物であることから、對句に仕立てられることが多いが、その場合に伴う自由、闊達といった、あらかじめ用意された意味が、杜甫の二句（評者注：「水檻 心を遣る」詩の「細雨 魚兒出で、微風 燕子斜めなり」を指す）にはない」（二三頁）。「江漲」詩の「輕やかに搖らぐ 浪を逐う鷗」も、『列子』「黃帝篇」の有名な逸話に基づく「無邪氣で自然な心といった意味」とは關わりがない。小さな生き物たちは、何かを表現するための手段として利用されているわけではなく、「人から解き放たれ」、「彼ら自身の生を生き」、「人も動物もそれぞれに大きな世界の一部として共存している」のである。

これらの興味深い數々の指摘は、いずれも詩中の小さな動物が詠まれた部分のみならず、それを含む一首全體にわたって丹念に分析された上で導き出されており、説得力に

富んでいる。まさに「生き物と人との關係が、文學の歴史のなかで新しいかたちに變わった」(二三頁)といつても過言ではないであろう。それまで詩には詠まれていなかった新しい題材を、杜甫が積極的に詩に取り入れたことは、もとより重要な文學史的事實である。だが川合氏の論考を讀んだ今、同じくらい重要で、かつ從來の文學史で閑却されていたのは、それまでも詩に取り入れられてはいたものの、ある特定の意味に覆われていた物から杜甫が意味を剝奪し、人の手から解き放った點にあるのではないかと、評者は思う。

杜甫はしばしば現實主義の詩人と呼ばれ、その詩はリアリズムと評されることが多いが、その場合「リアリズム」という語は、もっぱら「不條理に滿ちた社會の現實をありのままに描き出す」という文脈で用いられている感がある。しかし、杜甫の詩におけるリアリズムは、シクロフスキーのいう「非日常化」という側面からも語られるべきではないか。シクロフスキーは、藝術の目的と方法について、「生の感覺を回復し、事物を意識せんがために、石を石ら

しくするために、藝術と名づけられるものが存在するのだ。知ることとしてではなしに見ることとして事物に感覺を與えることが藝術の目的であり、日常的に見慣れた事物を奇異なものとして表現する『非日常化』の方法が藝術の方法」(ヴィクトル・シクロフスキー「水野忠夫譯」『散文の理論』十五頁、せりか書房、一九七一年)であると定義している。すなわち杜詩における藝術上の意義は、見慣れたがために日常化し、見えなくなっていた魚や鳥を「非日常化」して、生の感覺を回復させ、より魚や鳥らしくし得たことに存するといえる。寓意的な意味を帯びていたそれまでの魚や鳥は、自動化された知覺によつて再認されていたに過ぎないのだ。

杜甫が既成の意味から生き物を解放し得たのは、川合氏が論文中で繰り返し強調されているように、杜甫が生き物の特徴的な動きを捉えたためであろう。「浣花草堂にいた時に描出される小動物は、いずれも從來の詩では捕らえられなかった動きを捉え、日々の充足感に浸る杜甫自身の氣分と一體となつていくことができる」(二二六頁)。

生き物たちの具體的な動きが、對象の概念化を防ぐのに大きな効果をあげているのは疑いない。

ここで評者が興味を覚えるのは、すでに文學的因襲を背負った靜物——動きのない植物・器物など——から、杜甫がそれを覆う意味を取り去った詩句の例があるかどうか、もしあるとすれば、それはどのような過程を経て意味からの解放が行われたものなのか、ということだ。また、中唐の李賀の詩に多く見られる代詞の手法との關わりについても、評者の興味をかきたてる。川合氏が論文中で述べるように「人は生き物に意味を與えることで彼らを所有する」¹。だが、人による所有——支配と言ひ換えてもよい——は、その物にある特定の名前がつけられた時點ですでに始まっているともいえる。とすれば、既成の名を用いずに、別の言葉で事物を言ひ換える李賀の代詞の手法も、人の支配から物を解き放たんとする試みとして位置づけることはできないか。「トルストイの非日常化の方法は、彼が事物を通じて、常用いられている名前で呼ばずに、事物をはじめて見たもののように記述し、また、事件をはじめて起こったものの

ように描き、しかも事物の描寫にあたつては、廣く認められてゐる事物の部分の名稱を使用せずに、ほかの事物と對應する部分の名稱で事物を名づけているという點に存在する」(シクロフスキー『散文の理論』十七頁、傍點は評者による)。

杜甫を現實主義の詩人、李賀を超現實主義の詩人とみなして兩者を對立させる構圖は、文學史のみならず、研究論文にもしばしば見受けられるが、こうした單純化は大事なものを見失わせる。ある物を「非日常化」し、人の支配から解放するという手法において、杜甫と李賀の間には、意外な接點が存しているのではない。従來の文學史的常識を乗り越えるための示唆を、川合氏の本論文は我々に與えてくれている。

問題として残されているのは、川合氏のいう「小さな生き物たち」が杜甫によってどのように見出されたのか、言ひ換えれば、特定の意味に覆われていた小さな生き物たちを、杜甫がどうして新鮮な眼で捉えなおすことができるようになったのかである。ここで興味深いのは、微細なものへの關心を示した杜詩が秦州期に至って急激に増え、かつ

「歸燕」「促織」「螢火」といった小さな生き物たちを主題とした詠物詩も作られるようになってきていることだ。この点については、先ほど紹介した松原氏の論考がヒントを與えてくれるように思う。松原氏が指摘するように、官を辭して秦州に到着した時、天子と杜甫との關係はすでに「切斷」されていた。「天子」という制度で秩序づけられ、個々の事物に均質的な意味が保障されていた世界から離脱することによって、それまで見えていなかった様々な物が、新鮮な驚きを伴って杜甫の眼に飛び込んできたものではあるまいか。無論、秦州期の詠物詩は依然としてシンボリックな意味を帯びたものではあるけれども、成都期に「小さな生き物たち」を見出すための下地が、秦州期にすでに用意されていたのではないかと評者は考える。

* * *

廣德二年（七六四）六月、杜甫は劍南節度使嚴武の推薦によって節度參謀となり、成都で嚴武の幕府に出仕した。しかし翌永泰元年（七六五）正月に、杜甫は職を辭して浣

花草堂に歸り、さらに同年夏には草堂を後にして舟で長江を下り、慌ただしく成都を離れる。比較的安定していた成都での暮らしを杜甫がなげうち、家族を連れて旅立ったのはなぜなのか。この問いについては、『舊唐書』『文苑傳』および『新唐書』『文藝傳』の記載にもとづき、パトリックであった嚴武が亡くなり、生活の據りどころを失ったことが主な原因であると説明されるのが常であった。また、嚴武の推薦によって杜甫が得た檢校工部員外郎という身分は、實際の職務がない名目上の官——いわゆる虚銜——であり、節度參謀として幕府に出仕するに當たり、形式的に與えられた肩書きに過ぎないというのが定説となっていた。本書所收の陳尙君氏「杜甫の離蜀後の行跡に關する考察」——ならびに杜甫の死について——は、この二つの文學史的常識を根底から覆すに足る杜甫傳記論の白眉である。

陳尙君氏の論旨は極めて明快である。結論の一つは、杜甫が成都を發つたのは嚴武が四月末日に亡くなる前のことであり、杜甫の旅立ちと嚴武の死とは關わりがないこと。主な根據として、①親しい閑柄であった嚴武の死を悼む詩

がなぜか成都で作られていないこと。②杜甫は永泰元年六月には忠州に到着しており、途中でも多くの地に逗留している。成都を離れたのは遅くとも五月上旬から中旬であつたはずだが、嚴武が亡くなつた四月末日から十日前後という短い期間で長旅の準備ができたとは考えにくいこと。③同年春に草堂で作られた詩の内容から、春の内にはすでに旅立ちの準備が整つていた様子が窺えること、などが挙げられている。

もう一つの結論は、杜甫が授かつた檢校工部員外郎の官は決して虚銜ではなく、朝廷での就任を前提とした實職であり、杜甫が蜀を離れた目的は都で官職に就くためであつたということ。主な根據として挙げられるのは、杜甫自身の詩である。たとえば、杜甫が節度參謀の職を辭して草堂に歸つた後の作品「春日江村五首」では、其の三・其の四で員外郎の官を授けられたことに初めて言及し、其の五では中年になつて朝廷に召された賈誼に自らを重ね合わせている。また、夔州時代の作である「夜雨」詩には「籍に通ずるも多病を恨み、郎と爲りて薄遊を忝かたじけなくす」とあり、

員外郎となつたことが蜀を離れて旅に出た理由であると明言している。これ以外にも、陳尙君氏は論據となりうる杜甫の詩句を數多く引用しているのだが、その中の一つ、雲安での作とされる「客堂」詩に「臺郎選才俊、自顧亦已極。……主憂豈濟時、身遠彌曠職。循文廟算正、獻可天衢直。尙想趨朝廷、毫髮裨社稷」とあるのは、陳氏の説を裏づけるに足る、ひときわ重要な詩句であると評者は思う。「臺郎」すなわち尙書省の員外郎に選ばれたことと、朝廷に驅けつけて國家に貢獻したいという思いが同時に述べられていることはもとより注意すべきであるが、さらに注目に値するのは「身は遠くして彌いよいよ職を曠びなしくす」という認識の表明である。「職を曠しくす」とは、職務をおろそかにすること、もしくは職位はあるものの就任すべき人物がそこにいないことを指すが、そのいずれであるにせよ、工部員外郎が實際の職務を伴わない虚銜であればこのような認識を杜甫が抱くことはないはずだ。

では杜甫はなぜ當初の目的地である都へはついに歸ることがなく、湖南を漂泊してその生涯を終えることになつた

のか。この問いに對し、陳尙君氏は「長旅の疲れにより昔の病が再發し、雲安や夔州の地で療養することを迫られ、官職に就任する時期を逃してしまった」（一五〇頁）ことを、その原因として提示する。「朝廷内部の舊友は零落し、人事環境も變わつてしまつていた。杜甫は何度も朝廷内部の人物と連絡を取り、要人による推薦を求めたが、復職の話は決着せず、漂泊寄寓の生活を重ねるしかなかった」（同頁）。永泰元年（七六五）四月に成都を發つた杜甫が雲安に到着したのは同年の九月。當地で病に臥せり、半年間の足止めを食つた後、療養の地を夔州に移したのが翌年の三月。そこから三峽を出るまでに、およそ一年十か月を要している。その間にしかるべき就任期限を超過してしまつた可能性は、確かに高い。陳氏はここでも論據となりうる杜甫の詩句を涉獵し、都への歸還と官職就任が病によつて妨げられたことを説得力をもつて證している。

陳尙君氏の本論考の要は、正史の記載を批判的に讀みなおした上で、杜甫の詩そのものから詩人の行動原理を丹念に探り、さらに周邊資料と對照させることで、詩人の傳

記を見事に再構成してみせた點に存する。陳氏も述べているように、新舊『唐書』の敘述に誤りが多いことはよく知られた事實としてある。だが、その正史としての權威性は、なおも我々の思考に無意識のうちに制限をかけてはいないか。正史もまた膨大に存在する周邊資料の一つに過ぎないことを自覺し、まずは原資料——本論考の場合は杜甫の詩——を丁寧に讀み解くことの必要性を、本論考は讀む者に改めて強く感じさせる。

なお、本書評の冒頭ですでに述べたように、陳尙君氏のこの論考は既發表の論文を著者の許諾を得た上で翻譯したものであるが、このたび本論文集に收録されたことには、大きな意義があると評者は考える。理由の一つは、オリジナルの論文を收載する同氏著『敬畏傳統』（復旦大學出版社二〇一一年）が、なぜか日本國內の大學圖書館にほとんど所藏が認められないため。もう一つの理由は、陳氏によつて提出されていた杜甫の傳記に關する新説が、その重要性に比して日本國內においてはさほど話題になつておらず、十分に認知されているとは言い難いためである。

實のところ、『敬畏傳統』に收録されているオリジナルの論文「杜甫離蜀後の行止試析——兼論杜甫之死——」は、陳尙君著『唐代文學叢考』（中國社會科學出版社、一九九七年）所收の二篇の論文「杜甫爲郎離蜀考」「杜甫離蜀後之行止原因新考——《杜甫爲郎離蜀考》續篇」を總合して内容を擴充したものであり、全體の論旨に大きな變更は認められない。すなわち、杜甫が成都を發つたのは嚴武が亡くなる前であり、檢校工部員外郎の官が虚銜ではなく、杜甫が蜀を離れたのは朝廷で官職に就任するためであったという新説は、いずれも一九九七年の時點ですでに世に問われていた。日本では、齋藤茂氏の書評「中國學の主流を受け継ぐ研究／陳尙君『唐代文學叢考』書評」（『東方』二〇八號、一九九八年）が陳尙君氏の本説をいち早く紹介し、さらには松原朗氏が「杜甫夔州詩考序論——尙書郎就任を巡って——」（『中國文學研究』二九、二〇〇三年）の中で、陳氏の新説をより詳しく紹介しつつ、その問題點をも指摘されている。しかし本書評の冒頭で掲げた、杜甫に關する近年の專著八種の中で、陳尙君氏の新説に觸れているのは、古川末

喜氏の『杜甫農業詩研究』のみであった。興膳宏氏の『杜甫——憂愁の詩人を超えて』（二二三頁）および川合康三氏の『杜甫』（一九〇—一九一頁）には、檢校工部員外郎の官は名目的・形式的な肩書きであり、杜甫が成都を離れたのは嚴武の死が契機であった旨の記述が見えるが、陳氏の説には言及されていない。一般書であるがゆえ通説を記すにとどまったのであろうが、簡単な紹介があっても良かったように評者は思う。いずれにせよ、本論文集に收録されたことによって、陳尙君氏の杜甫傳記論は日本國內でいっそう認知され、その説の當否が檢證されていく過程で、杜甫晩年の傳記研究・作品研究に新たな展開をもたらすであろう。陳尙君氏の説の問題點については、オンラインでも公開されている松原朗氏の前掲論文「杜甫夔州詩考序論」ですでに指摘されているので、そちらを參照して頂きたい。松原氏は、陳尙君氏の「杜甫爲郎離蜀考」と「杜甫離蜀後之行止原因新考」の要點をまとめ、その主張を「基本的に妥當と考える立場にある」ことを表明した上で、陳氏が論據として擧げる一部の作品の制作時期について疑問點を示し、

夔州期の詩に見られる朝廷への歸還と員外郎就任に對する願望の推移について、陳氏とは異なる獨自の論を展開している。なお本書所收の論文「杜甫の離蜀後の行跡に關する考察」においては、松原氏が制作時期について疑問を提示していた作品のうち、「搖落」詩と「江上」詩の二例が削られているものの、松原氏によって指摘されていた舊稿の問題點はほぼそのまま踏襲されている。

評者が一番腑に落ちないのは、陳尙君氏による杜甫傳記論の集大成ともいふべき「杜甫の離蜀後の行跡に關する考察」から、唐代の檢校官についての考察部分がすっぱり抜け落ちていることである。同氏著『唐代文學叢考』所收の「杜甫爲郎離蜀考」には、唐代の檢校官制度の變遷について詳しく論じた章が設けられている。そこで陳尙君氏は、唐代の檢校官はもともと虚銜ではなく、實職ではあるもののまだ正式な任命を經ていない官であつたのが、肅宗・代宗の頃を境として虚銜に轉じていったこと、郎中・員外郎の檢校官の虚銜化はやや遅く、杜甫が檢校工部員外郎に任命された以後においても、檢校官であつた人物が後ほど正

式にその官に任命された例がなおも確認できることを、豊富な資料を引用しながら説得力をもつて論じている。杜甫が蜀を離れた目的が都で官職に就くためであつたことを證するのに、この一連の考察は必要不可欠である。煩を厭わず、唐代の檢校官制度に關する舊稿の記述が加えられていれば、「杜甫の離蜀後の行跡に關する考察」は、獨立した一本の論考として、いつそう完成度の高いものになつていただであらう。

最後に、本論考の譯者に心より勞いの言葉を贈りたい。陳尙君氏が次々と引用する膨大な資料の一つ一つに丁寧な訓讀を附しつつ、相當な分量のある元の論文をここまで正確に翻譯するに當たつて、譯者が多大なる勞力と時間を費やしたことは想像に難くない。日本國內では目に觸れにくかつた陳尙君氏の最新の傳記論を、本書の讀者が勞せずして享受できるようになつたのは、ひとえに譯者による渾身の譯業のゆえである。

ただ、そのことを重々承知の上で、あえて注文を申し述べるなら、最終的な校正作業の詰めの甘さが若干氣になつ

た。訓讀文とその後の原文との文字が一致していない箇所が多々あり、かつ誤字も随所に見られる。杜甫の弟の名「穎」が「頰」になり（二五四頁）、『明皇雜錄』の撰者「鄭處誨」が「鄭處海」になり（二六五頁）、宋・王得臣の筆記『塵史』が『塵史』になっている（二六五頁）のはまだよいとして、論文末尾で陳尙君氏の論文の原載書名を『畏敬傳統』と誤っているのは（正しくは『敬畏傳統』）、著者への禮を缺くのみならず、讀者が原載書をCZFEなどで探そうとした際に検索結果から漏れる可能性が生じる。また誤字とは別に、中國語の簡體字が變換されていなかったり、誤變換されているケースも目立った（「巴山裏」↓「巴山里」一三九頁／「毫髮」↓「毫發」一四四頁／「衛伯玉」↓「韋伯玉」一四七頁／「孟雲卿」↓「孟云卿」一五四頁など）。こうした誤變換は、本書所收の莫礪鋒氏「宋人による杜詩校勘の成果とその影響について」の譯文においても少なからず見られる。多少の校正漏れなら氣にならないが、ここまで数が多いとさすがに論文を読んで引っかけかりを覺える。

書 評

なお校正とは関係ないが、訓讀文にもう少し多くルビが振つてあると、より原文の意味が取りやすくなったように思う。少なくとも、一三八頁の「悵く望む」、一四四頁の「文を循めて」、一四六頁の「病肺に跼き」などは、ルビ無しでは譯者の訓みが讀者に傳わりにくいであろう。また、一三九頁の「浦注」や一五二頁の「牙將」などの語についても、原文の語をそのまま譯文に用いるのではなく、それぞれ「浦起龍の注」「中下級の將校」のように言いかえるだけで、ずいぶん印象は變わるのではないか。その點では、本書所收の葛曉音氏「杜甫七律の「變格」の原理と意義——明代詩論に見られる七律の傾向に關する論争を手がかりに——」における、丸井憲氏の譯が大いに參考になる。丸井氏の翻譯は、訓讀文に多めにルビが振られていて読みやすいだけでなく、「材料一つとして揀擇（けんじやく）「選り好み」無く」（二二八頁）のように、訓讀のみで意味が取りにくい箇所には、譯者自身の注記が括弧内に適宜附されており、さらには「七律という體式「體裁・樣式」の原理」（二三五頁）などのように、訓讀以外の箇所でも、著者の言葉をそのま

ま用いつつ注記によって説明を補うといった工夫が隨所に見られる。譯者にそこまでの負擔を強いるのが酷な話であることは重々承知の上だが、丸井氏の利便性の高い翻譯のスタイルは、古典分野の中國語の論文を譯すに當たつて今後選擇肢の一つに入れられてもよいように思う。

* * *

以上、本書所收の論文の中から三篇を選びすぎり、評者なりに内容を整理して私見を述べてみた。評者の力不足のゆえ、紹介はやはり限定的になり、本論文集の全體を鳥瞰する視點をついに持ちえなかつた憾みがある。だが、今回取り上げた松原朗氏・川合康三氏・陳尙君氏の論考はいずれも、杜甫に關する既定の文學史的常識に搖さぶりをかける意欲作であり、この三篇を收録している段階で、本書が杜甫研究史上において有する價值は十分に擔保されるであらう。言うまでもなく、今回は紹介できなかつた他の著者の論文も皆それぞれ獨創的で意欲に満ち、細分化された杜甫研究の各分野を更新するに足る意義と原動力とを具えた

ものばかりである。

なお、本書評の冒頭で紹介した『中國文學報』第八三冊「杜甫誕生一千三百年特刊」所收の論文には、本書『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』所收の論文とテーマが部分的に重なっているものが少なくない。たとえば、『中國文學報』所收の興膳宏氏「杜甫と七言律詩——ことに拗體詩について——」と、平田昌司氏「制御された逸脱——杜甫七言拗體論——」、および本書所收の丸井憲氏「七言拗體論の濫觴と展開——杜甫から黃庭堅へと受け繼がれたもの——」は、いずれも杜甫の拗體詩を中心に論じたものだが、皆それぞれにアプローチの仕方が異なつていて興味深い。また、『中國文學報』所收の小南一郎氏「杜甫の秦州詩」と金文京氏「山人としての杜甫」は、本書評でも問題にした、杜甫「立秋後題」詩の句「罷官亦由人、何事拘形役」に對してそれぞれ獨自の解釋を提示しており、松原朗氏「杜甫の『詩の死』——そして秦州における詩の復活——」の内容とも密接に關わる。さらには、『中國文學報』所收のウイリアム・H・ニイハウザー・Jr.氏「記憶の再現——杜甫「江

漢」を読む——」が提示した、杜甫の名篇「江漢」の新し
い読み方は、本書所収の土谷彰男氏「杜陵野客と腐儒」の
論旨に影響を及ぼさずにはいられないだろう。

本書の刊行によって、日本における杜甫研究は新たな實
を結んだのみならず、ここからさらに多くの種子が放たれ
たことは疑いない。本書所収の論文が提出した諸々の新し
い學説は、今後異なる學説と衝突し、あるいは融合しながら
辯證法的に杜甫の研究史を更新していくことであろう。

（研文出版、二〇一三年十月、四六三頁）